



退職のち放浪 時々起業 ところによって研究

原中 正行

1996年インドネシア/ブトン島。商社マンの私は、この島で天然に産出するアスファルトの開発のため、首都ジャカルタからでも12時間以上かかるこの島にいた。インドネシアは原油も天然ガスも採れる資源豊かな国だが、その原油を製油所で分離してもアスファルトはほとんど得られない。意外にもアスファルトはシンガポールから輸入している。でも唯一、この島には天然のアスファルトが産出されるのだった。その開発プロジェクトは私の10年間の商社マン人生で最もエキサイティングな仕事だった。他にもメタノール工場建設や石油化学コンビナートプロジェクトなどまさに総合商社のイメージ通りの『地図に載る仕事』をやってきた。私にはこの人生で果たしたい事柄がたくさんあって『夢プロジェクト』として88個のリストにしている。月並みだが『地図に載る仕事』もその一つだった。

その私が、なぜこの生物工学会誌に登場しているのかというと、現在は【学生】だからである。その昔まっとうに若い学生だった私は、ノーベル賞の朝永振一郎先生の銅像がある筑波大学のキャンパスで、ノーベル賞の白川英樹先生と同じ時に同じ廊下を歩き、ノーベル賞の江崎玲於奈先生（当時の学長）の名前の入った化学修士号までもらったが、就職は総合商社に決めた。研究は好きだったが、何かこう『世の中にでっかく貢献したい』という夢があったからだ。インドネシアの大型プロジェクトの場合、何でも2万人近くの雇用を現地に生み出すものと言われていて、及ばずながら少しは貢献できたのではないかと思っている。商社の仕事は本当にキツイが実際にエキサイティングな仕事だった。余談だが、いつも通りに仕事をしている時に「おい原中、今から行ってくれ」と上司に肩をたたかれ、その数時間後には通勤用の鞄一つで成田空港から飛ぶ、なんてこともあった。出張に行ったら毎回1ヶ月以上の滞在、着替えなどはもうジャカルタのホテルに置きっぱなしにしているので困らないが、この時ばかりは、帰国したら家の冷蔵庫の牛乳がすっかりヨーグルトになっていた（生物工学会だから一応補足しますが、この牛乳は低温殺菌でかつ未開封でした。いろんな意味で、生き生きとしていた！）。今も学生から就活の相談を受けると、専攻を問わず総合商社っていいよって薦める。

ただ私自身は、惰性という言葉が大嫌いで、それがゆ



オリンピック会場のアテネを目指し、アドリア海沿岸（クロアチア側）をハンガリーで買った自転車で南下中の筆者。

えにこの人生を10年単位で生きることにしている。今だから言えるが入社の時にやはり「商社は10年」って決めていた。そして退職後には、年齢的に結婚しているだろうから1年間ほどカミさんと一緒に海外放浪だと、つまり『退職のち放浪』ってのが夢だった。商社での10年間は毎月二人分の「放浪預金」をしていた。しかし気づいてみると10年経ってもシングルで、結局「放浪お一人様」。皮肉にもおかげでリッチな放浪生活。1年半もの間、バスや列車もさることながら飛行機にも40回ほど乗って地球をあっちこっち。そんなわけでこの時期の職業は【旅人】だった（よかったら『退職のち放浪』でググってみて下さい）。

放浪後は、さらにエキサイティングな事を求め、別の夢の一つだった『起業』を知人と二人で始めることにした（実は「放浪預金」と同時に「起業預金」も準備していたのだった）。21世紀を担うと言われている物質カーボンナノチューブを扱っていたのだが実はこれ、修士時代に研究室で作っていたもの。その時はビジネスの種になるとは思いもしなかったが、まったく人生とはわからんものである。この会社は、その物質を加工し供給することで他社の研究開発のサポートをするという、そこそこやればボチボチ儲かるビジネスで2年目に早くも黒字決算を達成できた。でもやはり『歴史に名前が残るようなノーベル賞級の発見・発明をし、世の中にでっかく貢献する』という夢はどうしても絶ちがたい。そういうこともあってこの黒字をきっかけに私は【ベンチャー経営者】をいったん捨て、今度は一発でかいことを狙うべく

研究開発を始めたことにした。だから今は、書類の職業欄には【山師】と書いている。

ただ研究には測定装置などのインフラが絶対的に欠かせない。また発見・発明した事実がサイエンス、テクノロジーにおいてどのような位置を占めるのか、その座標をきちんと認識するためにディスカッションの相手も必要。そして何より、自分には情熱があってもサイエンスの知識がまだまだ欠けている。それらが高度に集まっているのは大学なので、再び大学の門を叩き、今は博士課程後期の3年目というわけである。また『自分の発見・発明をビジネスにつなげたい』という夢を具現化するために、グリーンエナジーという会社を作った。ベンチャーを立ち上げる時には普通、何がしかの発明や発見をした後に、その技術を基に起業しビジネスを展開するものだが、私の場合にはフライングでスタートしてみた。この自分自身の発見・発見とそれによるビジネスが、人生最大の宿命に思えるからだ。

会社を設立するときには「定款」という会社の憲法みたいな取り決め事に、「会社の目的」を明確に謳わないといけない。でも何をやるか決めていないのでベンチャーのくせに総合商社の定款の会社の目的と限りなく同じにしてみた。何を意味するかと言うと、総合商社ってやつは、「もうかりや何でもやる」という会社。「ラーメンからミサイルまで」と言われるゆえんである。よって私の会社は、どんなビジネスでもできることになっている。常々、人間の想像力は自然の偉大さには敵いようもない、と思っているので偶然の発見・発明でビジネスの内容が大きく変わっても対応できそうだ。

後は肝心の発見・発見である。相当イイ歳こいての再スタートゆえ、経験を濃縮して積む必要がある。そこで半年ほど前から国内最大の研究機関である（独）産業技術総合研究所の研究室にも所属させてもらっている。あらゆる装置がそろっていることもさることながら、何より論文や書籍でしかお目にかかるない一流の研究者に接することができるのは最上の喜びだ。結果として早朝から夜遅くまでいくつかのテーマを並行して研究しつつ、さらに事業展開を構想したり人脈を築いたりで、時間的にはなかなか辛いものがあるが、だからといって時間を効率的に使っているわけでもなかったりする。まあその分、人の倍ほど長生きすれば何とかなるに違いない（頑張れ俺の突然変異！）。

私の専攻は有機化学だが、最近プロテオミクスと遺伝子組換えのトレーニングを積んだ。背伸びして視野をひろげているうち、背が伸びてしまうこともありうる。これが人生の面白さだなあと思う（正確には、収入乏しくカツカツで生きている割にどうもBMIが増加するので、ぶら下り健康器具を買ったからかもしれない！）。さてこうした縁もあって、このように生物工学会誌にも登場さ

せてもらえている（まだほとんど知り合いがないから、好きなことを書いているわけだが…）。そうそう、かなり脱線したが本原稿の趣旨は、学生など若手研究者が将来を選ぶ岐路において、励みになる文章を、という依頼であった。上述したように風変わりな私の生きざまとその考え方を示したところで、若い方々の励みになるかどうか甚だ疑問だが、まあこんな人生もあり、という意味で書いている。

先日学生から「知的財産を勉強しておいたら就職に有利でしょうか？」と聞かれた。『何であれ知識はあった方がいいけれど、会社選びは「有利かどうか」ではなく「自分はどう生きたいのか」、「何が好きなのか」をより強く意識したほうが良いんじゃない』と答えた。うーん、本人はピンときているのだろうか…。これは今の学生だけではないとは思うけど、ソニーやトヨタのような超大手に入りたいという学生はやっぱり多いと思う。アメリカならGE（ジェネラルエレクトリック）やIBM、今ならGoogleか。しかし、その会社で俺はこれをやりたいんだ！という現実的な将来像を描いたからというよりも、ただ漠然と有利だからもしくは格好が良いからそういう会社を選んでいる学生が多い気がする。でも果たしてそれで満足な人生になるのだろうか。過激かもしれないが私に言わせるとソニーとGEに入りたい、というよりも、ソニーとGEを創りたい、という方がよっぽどエキサイティングでお得な人生のような気がするのだが…（ちなみに弊社もGE<Green Energy>である。いつの日か、新聞にGEと書いてあったら「どっちの？」と確認が必要な会社になりたいと願っていたりする。今のところ「つくば市のごくごく狭いエリアでGEと言えば弊社なんです」と言うと笑いが取れたりするあります…）。

商社時代には、多様なリソースを最大限生かしながらプロジェクトを進めるというコーディネート力および経営感覚、さらには稼ぐ営業力、経理・会計の実務、基礎的な法律知識などを学べた。また最初の起業の時には、特許がベンチャーの命運を決めるため、知的財産をがっちりやった。さてこう書くと、一見起業のために戦略的に学び準備しているようだが、実際は糺余曲折ばかりだ。場当たり的なこともたくさんある。でも意外と遠いところで妙につながってきたりして、情熱を持って事に当たれば実のところ世の中何をやっても無駄なことはないんだなあ、というのが本音である。今は発明・発見のネタを探すという人生をかけた気構えがあるので、どんな話を聞いても面白い。テレビの受け売りだが、美術に詳しくない人でもミュージアムを回る時には、どれか一点を購入する気持ちでいると絵を見る姿勢が変わり退屈しないんだそうだ。それと何となく似ているのかもしれない。

「努力を継続できる能力こそ、本物の才能だ」と、ある

天才が語っている。私の場合、なかなかそういう状態までもっていけていないが、常々こんなことを意識している。「何かを成すための情熱」はさして重要ではない。そんなものはほとんどの人が持ち合わせている。でもたいていの人は、ただすべてがうまくいくように願うだけ。だから「成し遂げるために準備する情熱」こそが大事に違いないと。現在の私は、ベンチャー、学生、産総研と、結果として三足のわらじを履いているので歩きにくいことこの上ないが「成功とは人からの賞賛ではなく、自分の理想が努力によって実現して行くという満足感の中にある」と思って生きている……（などと書くと実に格好がいいが、それを言つていいのは、すでに拍手喝采を浴びている「いわゆる世間での成功者」なんだろうなあ、やっぱり…）。よって私の言葉には説得力も重みもないが、まあ自分の場合、この『どこでかい道楽』を進めるにあたり「それをやる」と決断てしまい、それからその方法を見つけて少しづつ準備するやり方で生きている。そんなバカが一人ぐらいいたほうが、世の中きっと面白いに違いない。

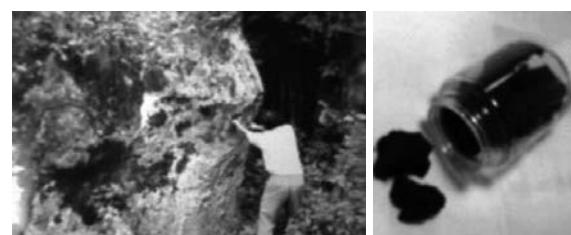
若い方々には、やり方はどうあれ、本当に面白いと思うこと、好きなことを追求する人生を送ってほしいと願っている。コツは、自分の価値観に目を向け、具体的に準備することだと思う。常識や慣例に従っている限りでは身の安全は保てるが、そこから外へ抜け出ることはできないし、その常識とは「平均」かもしれないが、人生の「正解」や「満足」ではないのだ。また具体的なアクションなしには何も進まないし、準備なしに飛躍することはできない。

こんな偉そうに書く私もかつて学部の頃には「自分は一体何がしたいのだろう」とか、修士の頃には「自分は本当に研究者に向いているのだろうか」などとよく悩んでいたものだ。世の中には、研究が楽しくて楽しくて家からラボまで走っていき、途中で転んで足から血が出ていることにも気づかずに実験している人とか、実験のこととで胸が張り裂けそうになる人もいるらしい。そんな話を聞くと、なおさらそう思った。一方で研究よりも世の中に貢献できる世界がある気がして、前述したように商社に就職を決めたわけだが、それでもその時はとりあえず目の前の10年を決めただけで、その後の10年の具体的な生き方については、最後の年に夢のリストを眺めな

がら決めればいいやと腹をくくったに過ぎなかった。そして結局今は、研究をやっている。

よほどのことがない限り、自分がどう生きたいかなんでものは、考えてすぐに出てくるものではないと思う。私の場合も多くの人々に会い人生観や社会観を聞き、たくさんの本を読み、いろいろな場所に行ってさまざまなことを経験してようやく少しづつ形成された。一方、1つの生き方を選択したからといって、それで一生が決まるわけでもないとも思う。私が心がけてきたのは、いきなり偉大なことはできないけれども常に偉大なハートで事に当たろう、と決め少しづつ準備をすること。もし人生の岐路において悩んでいる方がいるならば、その準備の1つとして私からのお薦めは、人生について感じたこと、考えたこと、やりたいこと、何が好きで何が嫌いか、どんな瞬間に充実感や徒労を感じるなどをその都度メモしていくことである。これを研究に例えるなら、ちょっとやってみた、というお試し実験の結果や考察でさえも、その都度ラボノートに書き留めるうちに、断片では分からなかった全体像が突然見えてくるってことに近いかかもしれない。私の場合には、88個ある夢をエクセルに書いて時々見直している。そうする前にもやりたい事は漠然とあったが、リストにすることで遠くが見渡せ、行動が明らかに能動的になった（それもアスリートのように！）。

冒頭の天然アスファルトのプロジェクトは、その後のアジア通貨危機のあおりで、実は頓挫したままである。当時弾いた損益分岐点は、原油価格が33ドルの時であった。もし完成していれば、今頃は現地に左ウチワを持った私の銅像、いやアスファルト像でもできていたかもしれない。でもせめて「何ぞ、おもしろい微生物でもいないかな」と思い、今も大事にサンプルを持っている。これも88個の夢プロジェクトの1つなのだ。



天然アスファルト採掘の様子（左）と保存しているサンプル